The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	精神分裂病患者の視覚認知機能に関する研究
Author(s)	青山, 昌彦
Citation	大阪大学, 1986, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/35241
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏名・（本籍）	青山昌彦（あおやま まさひこ）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 7192 号
学位授与の日付	昭和61年3月25日
学位授与の要件	医学研究科 内科系専攻 学位規則第5条第1項該当
学位論文題目	**精神分裂病患者の視覚認知機能に関する研究**
論文審査委員	（主査） 教授 西村 健 （副査） 教授 眞鍋 禮三 教授 白石 純三

論文内容の要旨

（目　的）

精神分裂病の基本障害を認知機能の障害とする考え方が最近広く行なわれるようになり，多くの研究がなされてきたが，最も重要な視覚認知機能に関しては，情報処理モデルに基づいた中心視の研究が主であり，周辺視の研究はほとんどなされていない。しかしながら，分裂病患者が周囲をどのように見ているかという観点からその日常行動を観察してみると、「有効視野」の狭窄即ち周辺視の障害を疑わせる場合が多い事に気付く。広い範囲の情報を処理する場合，中心視の視角約2.5°という範囲を考えると，周辺視の役割は極めて大きい。そこで私は，様々な条件下で瞬間的に提示されたターゲットの検出率を指標として，精視分裂病患者の周辺視を正常者のそれと比較検討することにより，精神分裂病における視覚認知機能の障害を明らかにしようと試みた。

（方　法）

対象は精神分裂病患者30名，正常者30名，患者の罹病期間は6年から20年，平均10.9年で急性期の患者は含まれていない。

方法はコンピューターで制御されたディスプレー上に“○”又は“×”のターゲットが瞬間的に提示され，これが何であったかを答えるのであるが，中心固視点よりのターゲットの偏心度を2°，4°，6°，8°の4種類とした。

実験は，中心にドットが点滅し（中心負荷）その途中で周辺にターゲットが提示され中心ドットの点滅回数とターゲットの種類を答える場合（A系列）と，中心ドットの点滅がない場合（B系列）の2系列からなり，各系列とも背景にノイズがない場合（実験1），ターゲット“×”に類似のノイズがあら

かじめ提示されており低密度の場合（実験２），高密度の場合（実験３），ノイズとターゲットが同時に瞬間的に提示される場合（実験４）の４種類の実験を行なった。

各実験は36回の試行からなり，従って一被検者につき36×４×２＝288回の試行を行なって，各条件ごとにその正答率を算出した。

（成　　績）

(1) 両群とも偏心度が大きくなるに従い正答率は低下したが，ノイズが無い場合でも偏心度の大きいところで分裂病者群の方が有意に成績が低下していた。

(2) ノイズが存在する場合両群とも成績の低下をみた。しかしノイズとターゲットの類似性の影響については，ノイズがあらかじめ提示されている場合は分裂病者群にのみその影響がみられ，ノイズとターゲットが同時に提示される場合は両群ともにその影響がみられた。ノイズの密度については両群ともに大きな影響はみられなかった。

(3) 中心負荷に関しては，両群ともその有無により大きな成績の違いはみられなかったが，分裂病者群の場合周辺課題の難易度が中心課題の成績に影響を与えていた。

(4) 分裂病患者の臨床症状総合評価及び陰性症状評価の重症度と周辺視の機能低下との間に有意な相関がみられた。

(5) 成績に影響を与える可能性がある，服用中の抗精神病薬，罹病期間，知能，練習・疲労効果についての検討を行なったが，成績との相関はみられなかった。

（総　　括）

(1) 精神分裂病患者の周辺視の障害が明らかにされた。

(2) ノイズの有無やターゲットとの類似性の差による成績の違いから，分裂病患者の場合与えられた視覚情報の利用の仕方に障害があると考えられた。

(3) 臨床症状との関連や認知心理学上の知見とを合わせ考えると，分裂病患者の示す行動異常の根底に周辺視の障害がある可能性が示唆された。

論文の審査結果の要旨

精神分裂病の視覚認知機能に関する研究は，多くが中心視の研究であり，周辺視に関する詳しい研究はほとんどみあたらない。本研究は様々な条件下で瞬間的に提示されたターゲットの検出率を指標として，精神分裂病患者の周辺視を正常者のそれと比較検討し，分裂病患者に周辺視の障害があることを明らかにした。またノイズとターゲットの類似性の差による成績の違いから，分裂病患者の場合与えられた視覚情報の利用の仕方に障害があることが示唆された。この成果は，精神分裂病における視覚認知機能の障害に関して重要な知見をもたらしたものであり，学位に値すると認められる。